

第17期 「京都教師塾」

令和5年3月4日

塾生通信

学びの広場

March

京都教師塾通信

No.10

京都市教育委員会 教員養成支援室

第9回京都市教育学講座 講師;保護者3名【小学校・中学校・総合支援学校】 「先生を目指す塾生に期待すること ~保護者の立場から~」



第9回は、小学校、中学校、総合支援学校から3名の保護者の方をお招きし、パネルディスカッション形式でお話を聞きました。学校に通う我が子を見守る中で印象に残っている出来事について、具体的なエピソードや思いを交えながら話してくださいました。また、親として学校や先生に期待することや塾生へのメッセージの中で、「子どもにとって、先生の言葉は心に残る。様々な経験を積みながら、長期的な目で見て、子どもに寄り添ってほしい（小学校）」「授業のスキルが高く、学習に向かう子どものモチベーションが上げられる先生は、子どもとの信頼関係ができています。最も頼りになる存在として、常に子どもの味方であってほしい（中学校）」「知ろうとする姿勢、寄り添う姿勢、迅速な対応ができる先生は信頼できる。五感をフルに活用しながら、問題のある子どもを「困った子」ではなく「困っている子」として受け止めて、手を差し伸べてほしい（総合支援学校）」といった言葉をいただきました。

分散会では、「保護者との信頼関係」について話し合う姿が多く見られました。保護者との信頼関係を築くためには、まず、子どもとの信頼関係を築く必要があります。一人一人の子どもたちに対するコミュニケーションの在り方や丁寧な授業づくり、学級経営などを大切にされた地道な実践を積み重ねていきましょう。

第7回特別講座「京都市における小学校英語の実際と指導のポイント」 講師;学校指導課 石井正 参与



第7回は、学校指導課の石井参与による小学校英語についてのご講義でした。まず初めに、小学校のすべての学年で英語教育を行っている京都市の取組についてお話しされました。そして、1・2年生の英語活動に始まり、3・4年生の外国語活動、そして、5・6年生の外国語と続く中で、中学校や高等学校における学びとも関連付けながら、小学校英語における「見方・考え方」や「言語活動」、「育成を目指す資質・能力」などについて分かりやすく解説されました。その中で、外国語をコミュニケーションの道具としてとらえるだけでなく、多文化共生の姿勢や相手意識、目的意識を育むためのものとしても位置付けられていたことは、とても印象的だったのではないのでしょうか。また、言語活動について解説される際には、児童が学びの必然性を感じることでできる活動を設定することを強調されるなど、他教科・領域、または他の校種においても指導者が大切にすべき考え方について、実際に英語を用いた言語活動のデモンストレーションを示されながら教えていただきました。加えて、令和みやこ英語スタンダードやプランニングガイドといった、京都市が独自に開発してきた授業づくりのための資料についてもご紹介されました。本講座での学びを生かし、児童の実態をしっかりと見極めた上で、「やってみたい」と思える言語活動の設定や、学習の系統性とスモールステップを重視した丁寧な指導を目指していきましょう。You can do it!!

今日は、保護者の目線から教師、学校に求められることについて学んだ。その話を通じ、私は教師が子どもと関わることで悩みや不安を抱くのと同じように、保護者も我が子を学校に預ける中で抱く悩みや不安があるのだと感じることができた。また、教師を目指す上で、保護者の立場になり、信頼や安心を生み出すように心がけることは必要不可欠であると思った。そこで私は、この講座から学んだ二つのことを大切にしたい。

一つ目は、情報共有である。保護者の方々の話から、安心できる学校づくりには、子どもの様子を確認できる媒体、あるいは子どもの口から保護者に学校について報告できる環境が必要だと感じた。子どもが学校に行く時間は、保護者にとって空白の時間であり、自分の子どもが何をしているのか、楽しんでいるのかなど、不安に思うこともあるだろう。そのため、子ども自身が学校について語ることや、自己表現が苦手な子どもの場合は、連絡帳やホームページなどを通じて、誰もが学校の様子を知ることができる工夫をすべきだと思う。また、私は組担当の先生の言葉から、対面で話し合う重要性を学び、文字だけでは伝えきれない子どもの情報は必ずその保護者と話し合い、共有することをやりたい。二つ目は、大人としての自覚である。保護者の方々の話から、良い悪いにかかわらず、子どもは教師をよく見て学んでいくのだと感じた。そのため、教師の行動や言葉は、子どもの成長に深く関わるチャンスを生み出すとともに、その逆にもなり得ると考える。今、私は文字の丁寧さや正確な書き順、言葉遣いに至るまで欠点がたくさんあり、自覚が足りていないことを反省している。しかし、今日気づけたことが重要であり、これから日々改善に務めて、子どもの前に立っても恥ずかしくない立派な大人になると決心できた。

最後に、子ども一人一人に必ずその子の成長や健康を願う保護者がいることを肝に銘じ、子どもと保護者の両方から信頼される教師を目指したい。

「保護者の目線から」と思いながら聞いたことが、まずよかったです。「子どもの目線に立って」と同じく、とても大切な受け止め方です。保護者のお話から、「子どものために」「子どもを思って」日々、子育てをされていることが分かり易く伝わってきました。保護者の言葉の中には、厳しい見方もあったかもしれませんが、学校を責めているようには聞こえませんでした。「学校の教育活動が子どものためになっているか」という本質に繋がっていました。そして、そのような点について、「保護者の目線から」お話を聞いたことで、このレポートからも、あなたが自分を素直に振り返り、よい教師になることを目指したいという気持ちが伝わってきました。

京都市教育学講座⑨の様子

2/25(土)



2/28(火) 補講

